

氏 名 山村 奨

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1975 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 近代日本の陽明学理解の系譜

論文審査委員 主 査 教授 瀧井 一博
教授 伊東 貴之
教授 磯前 順一
名誉教授 末木 文美士 総合研究大学院大
学
教授 小島 毅 東京大学 大学院
人文社会系研究科

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本論文では、明治期以降に陽明学を学んだ者たちが陽明学を変容させた系譜を、主に三人の人物の陽明学観を分析することで明らかにした。その三人とは、井上哲次郎・高瀬武次郎・石崎東国である。またその他に、近代日本において陽明学に関心を寄せた思想家たちの、主な言説を考察した。

まず従来の日本思想史研究では、儒学思想に近代性が内包されていたか否かが問題となっていた。それに対して本論では近代日本と陽明学との関係を、同時代の影響による陽明学の変遷と捉えた。また、前近代の水戸学や大塩の乱との関係も検討した。

次に既存の思想史研究では、陽明学は近代日本において二通りの解釈がなされたことを概括した。ひとつは井上哲次郎とその弟子の高瀬武次郎が、陽明学を国民における道德との関連によって考えた例である。もうひとつは、それに対抗して内村鑑三や石崎東国らが陽明学を社会改革の思想として言及した例である。これまでの研究では、後者の意義が比較的重視されていた。

しかし近代日本において陽明学がどのように解釈されたかを見ることで、上記のような対立とは異なる構図が判明した。明治期には陽明学が幕末の志士たちの精神的背景となることで、明治維新に貢献したとする言説が知識人の間にあった。同時に陽明学が幕府によって奉じられた朱子学に対抗して、体制変革を導いた思想であるとする見解も生じた。

旧体制を変革に導いた思想が陽明学であるとするれば、維新が成功した明治の世において今度は陽明学が現体制を支える思想的根拠になる。そのことが、陽明学は国民における道德と関連するという思想に発展する。一方で陽明学が改革を促したという観点に着目すれば、社会改革の思想になる。すなわち両者の視点は、当時見られた同じ言説に根拠を持つ。

以上の内容を踏まえて、本論では明治期以降の陽明学理解において三つの視点が重視されていたことを考察した。井上哲次郎が陽明学を道德として考えた観点と、石崎東国が現行の社会の改革に援用しようとした視点と、高瀬武次郎が陽明学は精神の修養に資するとした視点である。これまで見たように、これらの視点を互いに対立するとはみなさず、井上・高瀬・石崎の順に陽明学観が変遷してきたことを明らかにした。

第一章ではまず三宅雪嶺に言及し、三宅の陽明学理解がその後の陽明学理解の先駆といえることを述べた。さらに、同時代の吉本襄・東敬治・三島毅・渋沢栄一にも触れた。三宅以下の人物たちは皆、陽明学をどのように現実の社会に援用できるかに関心を寄せた。

次に井上哲次郎の陽明学観を考察する上で、前提となる問題を考察した。井上は日本にキリスト教が流入することで、国内の秩序が乱れると主張していた。既存の他の宗教にも井上は批判的であり、それらの倫理的側面を折衷した「倫理的宗教」が普及すべきと考えていた。そのため、儒教の場合も「倫理」の側面に注目する。井上は陽明学に対しても、国民道德の理解に役立つために評価していた。よって井上が重視していたのは「民心の統合一致」であり、その目的に沿うという合目的な理由で陽明学を重視していた。

第二章では井上の論理の前近代との関係を明確にするために、水戸学との共通項について検討した。後期水戸学の会沢正志齋は、井上同様キリスト教の流入に強く反発しており「民心」の「統合一致」を求めている。井上が水戸学の言説に直接影響を受けた訳ではな

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

いが、井上の対外意識は、幕末の水戸学の論理と共通している。例えば井上は同時代の他の知識人と同じく、陽明学の「知行合一」を実践の重視とみなしている。会沢もまた、実行の重視による学問と実践の一致を主張していた。井上自身は水戸学と陽明学を明確に区別していたものの、両者をともに明治維新を準備した思想と考えていた。故に、井上の陽明学理解は前近代の影響下にあることが分かる。

また井上は大塩の例を挙げて、陽明学が社会主義と通底し、社会秩序を乱す可能性があると言った。大逆事件が起きた際に、井上は陽明学を問題視する演説をおこなう。特に井上以降、陽明学が社会主義と通じるといふ言説が陽明学を奉じる人物たちの関心の的になった。以上の考察で、井上は前近代と同時代の思想を吸収しつつ、陽明学を変容させたことが明らかになった。

第三章では、高瀬武次郎を取り上げた。高瀬は、師の井上哲次郎の国家主義的な陽明学観を踏襲していると理解されてきた。しかし本論で高瀬の陽明学観は、精神の涵養を重視していた特徴があると論証した。同時に高瀬は大塩による救民の行動を称賛しており、個人の精神を鍛えることを社会福祉につなげて考えていた。陽明学に反秩序の側面があることを問題視した井上と異なり、高瀬は陽明学の修養によって社会に資することを求めた。高瀬の社会への視点は、後に儒教によって中国の人心統一を求めるという発想につながる。

また高瀬は石崎東国と親しい関係にあったが、後に対立した。既存の研究では、両者の対立は国家主義と社会主義的な意見の分裂と見られていた。しかし実際は儒学を活かす対象について、国家と一般の社会のどちらに重きを置くかという相違に過ぎなかったことを明らかにした。

第四章では、石崎東国を取り扱った。特に石崎が社会主義に関心を寄せ、陽明学による社会の改革を唱えた側面に着目した。しかし石崎は、陽明学と国家体制が矛盾するものではないという態度を取っていた。また石崎は大塩や藤田東湖に言及して、陽明学と水戸学が社会改革を断行する精神を養う思想であると説く。石崎の陽明学観は、陽明学による精神修養と社会への貢献を説いた高瀬に近い。以上の考察から、井上・高瀬・石崎の流れは陽明学の援用の主眼が、国体から個人の修養に至り、社会の改革へと変遷していく過程であると分かった。

第五章では内村鑑三やキリスト教徒、西田幾多郎、森鷗外、司馬遼太郎など陽明学に関心を寄せた人物たちの思想を検討した。特に三島由紀夫は大塩に関心を寄せ、陽明学が「行動」を起こさせる精神を養うと考えていたが、この考え方は広まらなかった。それに対して安岡正篤は大塩の行為や陽明学を擁護して、陽明学は精神を鍛える思想であると強調した。安岡は高瀬の文献を複数参考にしており、高瀬の陽明学理解が昭和期につながったことが判明した。

終章ではこれまでの考察をまとめるとともに、近代日本の陽明学理解の系譜について改めて述べた。明治期から昭和期にかけての陽明学理解は、陽明学を援用する対象が国家から個人の内面へと変遷していったことが明らかになった。その中でも特に高瀬のような精神修養と社会への意義が、昭和期に着目された。

また一方で近代日本の陽明学理解は、大塩の行動と陽明学の関係をどのように評価するかという視点もあった。大塩は一面では民衆の救済者とみなされ、別の面では秩序の破壊者でもあった。

(別紙様式 2)

(Separate Form 2)

以上の考察から近代日本における陽明学は、水戸学や大塩の存在など前近代の影響を受けつつ、同時代に活かすために変容させられ、内面の修養のための思想として集約していったと結論づけた。